

# A B r i e f N o t e   N o . 1 8 3

発行日：2007.7.14

発行人：Matsuo Masayasu

## 大自然の北海道

取手市    松平 功

### 1. 北の大地

時折、小雨が落ち低い雲が立ち込める、5月末、早朝の羽田を飛び立ったJALのジャンボ機は一時間半後、千歳空港に降り立った。そこには気分を爽快にさせる陽光が、北の大地に降り注いでいた。

さっそく、ツアー客の一行は出迎えの大型バスに乗り込んだ。

札幌を經由し、途中、今注目の旭川・旭山動物園を足早に観て回った。

ペンギン館、アザラシ館、しろくま館などは平日であっても、行列をなす人気である。ここでは動物たちの姿、動きを間近に観られるよう色々な工夫がなされ興味深い。動物たちの様子を見ていると飽きず、惹きつけられてしまう。めったに来る機会とて無く、一日中でも見ていたいと思うが、時間とスケジュールの逼迫したツアー旅行の宿命で、やむなく次の目的地を目指すバスに乗り込む。

ほぼ、北海道の真ん中に位置する旭川を後に最北の稚内に向けてバスはひた走る。あくまでも澄みきった青い空に、白い雲が沸き緑の地平線に接する。その地平線に向けてただ、ひたすら道路は続いている。北海道のスケールの大きさを実感する景観である。

稲作の北限であろうか、しばらく続いていた田園風景も名寄を通り過ぎる頃には沿道の左右に北海道ならではの牧歌的な酪農の風景が広がって来る。

初夏を思わせる穏やかな日差しを受け、なだらかな傾斜の牧草地に悠々とホルスタインが草を食んでいる。

息苦しくさえある東京の雑踏に毒されている身には、なんとも清涼を与えてくれる風景である。だが、のんびりと見えても、そこで働く牧夫は家族総出で一年365日重労働の連続だそうである。生きものである乳牛の世話は、一日たりとも気を抜くことが出来ない。朝早く起きての蓄舎の清掃から始まって搾乳、放牧、牧草の刈り取りなど、またマイナス30度ともなる冬の極寒に耐えながらの労苦はなみたいていではないであろう。

バスは手塩川に沿って、なお北へと走る。北の大地を流れる川としては

石狩川に次ぐ大河である。今、全国どこの川も兩岸をコンクリートで護岸され、無意味な堰が作られたりして川の景観を無粋なものにし、また川の生態系をも破壊している。だが流域に川を汚染する生活廃水が流れ込まないこの川は清澄な流れを保ち、コンクリートの護岸も少なく自然の姿を残した美しい流れである。流域の山間には白樺やブナが今、新緑の盛りである。周りの鮮やかな緑を川面に映して悠々と流れている。



ただ真っ直ぐな道

## 2. さいはての稚内

ほとんど人家も無く、人の生活域を離れた山間部をバスは延々と走っていたが、やがて道路が交わる所に信号機が現れる。まばらではあるが人家や商店が車窓から見られるようになった。人間の営みの匂いが恋しくなる。徐々に町の気配を感じるようになってきた。やっと最果ての稚内の市街に入って来たようだ。ここは北緯45度20分、最北の地の夕暮れは遅い。もう夕方7時を過ぎているが、やっと夕闇の気配が街にただよってきた。この地は日本海や遠くカムチャッカ、サハリンから渡って来る強い風が絶えず吹き荒れている。小高い丘のあちこちに十数米はあるうか高い風力発電の白い風車が立ち、風に向かってゆったりと大きな羽を回している。

最果ての町は寂しい。低くポーっという船の汽笛が波止場から街中に響き渡ると、なんとなくもの悲しさが街を覆っていくようである。

ここ稚内はJR最北の駅である。二両連結の小さな列車が人気の無いホームに寄り添うように止まっていた。古びた駅舎には何も無く、ひとつあるホームはただ、閑散としていた。

北から吹いてくるしたたかな風は荒れ狂う波を伴ってくる。波止場の乗船客が高波により、海に転落する事故が相次いだ。

この激しい波から港を護るため、昭和11年に堅牢な防波堤ドームが築かれた。

太い円柱とアーチの回廊など、古代ローマ建築を想わせる佇まいが北の街の波止場に似合っている。

ドームの所々に仄かな明かりが燈され、夕闇迫る静かな波止場に華やぎをもたらせている。

かつてはサハリンへの玄関口として栄え、賑わいをみせた時期もあったこの街は、今は漁港と海産物加工の街として細々と息づいているようである。明朝は4時起きで早朝、当地から出航するフェリー乗船が予定されている。ホテルでの夕食が終わるや入浴を済ませ

ると早い目の就寝となる。早朝の起床とバスでの長時間移動で疲れた体はベッドに横たわるや否や快い睡魔に襲われた。

明朝、白夜の街の夜明けは早い。4 時には既にカーテン越しに外の明るさが漏れてくる。夏至近くには 2 時前から東の空が白み始めるそうである。



防波堤ドーム

### 3. 紺碧の礼文島

今、北海道は観光シーズンたけなわで、我々のようなツアー客が東京や関西方面から、大挙して押し寄せる。特に利尻、礼文島観光は人気があるようで、5 月から 9 月までとシーズンは短く、これから夏場に向けピークを迎える。

早朝、朝一番稚内港から礼文島へ渡る大型フェリーは既に満席である。デッキに出ると早朝の冷たい潮風が心地よい。船の左手にまだ残雪のある美しい利尻富士が雲間に見え隠れする。2 時間足らずで礼文島、香深港の埠頭に横付けされた。埠頭からタラップ 2 基がフェリーの横腹に付けられると堰を切ったようにそこから船客が列をなして流れ出てくる。港は長閑な入り江になっており、防波堤が外海との境界をなしている。そこにはカモメが猫のような啼き声を発しながら飛び交っていた。フェリーから降りた船客は同じフェリーから下船したバスに乗り込み、礼文島の観光ポイントへ向かう。

朝方垂れ込めていた雲も晴れ、今日も透明度のある北の地の空は抜けるように蒼い。ここは島の北端スコトン岬、眼下に広がる 360 度の眺望は雄大で、すぐそばにトドが生息するというトド島が浮かんでいる。澄み切った紺碧の空と波ひとつない静かなコバルトの海が接する水平線は極わずかな球線を描き、地球の円弧を示している。幾分は綺麗になったとはいえ、油やごみの浮いた東京湾の汚濁した海を毎日のように眺めさせられている身には、この澄み切った美しい海はこの世のものとは思えないほど純なものとしてこの目に映った。

木々が育つには、あまりにも気象条件が厳しいのか島の北端部は熊笹で覆われているようだ。この島は本州の 2 千米級の高地しか見られない、珍しい高山植物の宝庫だ。この島

でしか見られない、レブンアツモリソウ、レブンソウ、をはじめクロユリ、オダマキ、などの可憐な花が群生している。



スコトン岬からトド島を望む

#### 4. 美嶺、利尻富士

地図の上では北海道本島北端の狭まった野寒布岬の左横に米粒、豆粒のような礼文島、利尻島が隣り合わせに斜めに並んでいる。

礼文島からはフェリーで 40 分の距離である。目の前にヨーロッパの山のような利尻富士の山容が迫っている。頂上付近は噴火による鋭く、荒々しい溶岩の峰となっているが、山の全容としては、どの火山にもみられるような、なだらかな稜線を描きそれが海岸まで続いている。島全体がひとつの山を形成している。遠く沖合いから望むと美しい秀嶺があたかも海上に浮かんでいるように見える。

穏やかな砂浜は少なく、海岸線はいたるところ噴火により流れ出た溶岩で荒々しい。全国的に有名でブランドともなっている利尻昆布はウニ漁とともに、この島の重要な財源である。点在する集落の磯にはカンバとよばれる丸い石ころを敷き詰めた場所がある。海から揚げてきた昆布をここで天日に干すことにより、良質な昆布となる。

バスは島の海岸線に沿い、利尻山を右に見て周回道路を走る。見る角度によってこの山は違った表情を見せる。一日中雲ひとつない山の姿を見せるのは年間を通じて、そうあるものでなく、一日中雲の中に閉ざされての観光もあり、我々ツアー客は実に幸運だとバスのガイドも言っていた。

この山は休火山であり島のいたるところに天然温泉が湧き出ている。しばし旅の疲れを宿の温泉で癒し北辺の地の旅愁に浸る。時の流れも止まったようで、なんとも至福のひと時である。

明朝、ホテル出発の時間までには少し時間が有りホテル周辺の地をぶらついてみた。展望台に通じる細い山道を上って行く。朝露で足元が濡れる。

ここから正面に位置する利尻富士は今、朝の霧に覆われ僅か麓を覗かせているだけであ

るが時間の経過とともに霧が徐々に晴れ、しばらくすると、劇場の幕が上がるように美しい山の全容が現れた。劇的なシーンであった。

この展望台の裏側は海に面し、ゴツゴツとした岩肌の垂直な崖となっている。

そこには今、繁殖期であり多くのカモメが巣営していた。隙を狙って狡猾な数羽のカラスがヒナや卵を奪おうと岩場を飛びまわっていた。これも自然界の厳しき摂理か。

展望台へ行く途中の小高い丘にひっそりとした会津藩士の墓と墓碑があった。

幕末、幕命により、ロシアからの北辺の守りという使命のためにこの地に就いた会津藩士たちの多くは極寒のため水腫病に冒され、飢えと寒さに耐えられず、再び故郷の地を踏むことなく、敢え無く非業の死を遂げた。

いくら雪国の会津とは言え、マイナス 30 度の野外の極寒は防寒、暖房の乏しかった当時においては、あまりにも人間の耐える限界を超えていたのだろう。

無念のうちに故郷会津を偲び、死んでいった藩士たちの胸中を思うと、せつなく胸がしめつけられるようである。戊辰の役とともに会津藩の哀史である。



利尻富士

## 5. 次の世代に遺していくべき自然

今まで、北海道を数回訪れてはいるが、いずれも会社の出張がてら足を伸ばし、僅かな時間を割いて札幌や函館などの街をぶらついたにすぎなかった。

今回のツアーは南部から北端へと縦断し、未知の北海道の懐の深さ、自然の濃さを感じた感動の旅であった。まだこの国も捨てたものではなく、素晴らしい自然が残っていた。地球温暖化が叫ばれている昨今、この素晴らしい無垢な自然を保護し、次の世代に遺していかなければならない。これ以上自然破壊が進まないことを祈るのみである。

(2007年6月記) 以上